

《白楽天》の背景と金剛流での扱いについて

相山女学園大学 飯塚恵理人

能《白楽天》は、唐代の詩人白楽天が「日本の智慧を計れ」との宣旨をこうむって日本へ向かい、到着した筑紫の海上で漁師の翁と問答をし、翁の智慧の深さと当意即妙な和歌の詠みぶりに圧倒され、帰国を決意する。翁は住吉明神の化身であり、白楽天の船を吹き返す、という粗筋である。大唐随一の知識人・白楽天でさえ敵わない和歌の徳と智慧を有する小国日本の優位性をうたう能である。例えばワキが勤める白楽天の装束は、金剛流現行謡本には「唐冠、着付厚板、白大口、狩衣、腰帯、唐団扇」とあり、文人としての白楽天よりも唐の勅使としての性格を表したきらびやかな正装である。対する漁翁の装束は「面三光小尉二モ、尉髪、着付無地鬘斗目(着流シ)、水衣(両肩上ケ)、腰帯、扇(前二指シ)、釣竿(持ツ)」となっており、粗末な労働着の水衣を着して袴を着けない仕事中的、尉の面や白髪の前髪が表す老いた漁師という対照的な姿である。粗末で身分の低い翁でさえ、詩で名を馳せた白楽天を驚嘆させる和歌を詠むという日本の優位性を際立たせる。

*

《白楽天》は竹本幹夫氏(注一)、伊藤正義氏(注二)、天野文雄氏(注三)が、世阿弥作の可能性が高いと述べている能である。その成立には「応永の外寇」が影響しているという説を高野辰之氏(注四)

が唱えている。応永の外寇とは、室町時代の応永二十六(一四一九)年六～七月に起こった李氏朝鮮の対馬への軍事侵攻である。なお世阿弥は永享八(一四三〇)年に『金鳥書』を書いているので、貞治二(一三六三)年生年説によれば応永二十六年には満五十六歳で存命である。李氏朝鮮は倭寇の本拠地が対馬であると考えて討伐軍を送ったが、対馬の宗貞盛らの抵抗により軍は敗退した。これが応永の外寇の実態であるが、この時、都には「中国」大唐が攻めてくる」と伝わり、知らせを受けた都では大規模な祈りの行事が何度も行われた。例えば義満・義持・義教の三代の將軍に信任が厚かった政治僧・満濟准后が書いた『満濟准后日記』には、応永二十六年七月二日「異国調伏御祈事」(注五)とある。そして同月十九日(注五)には「今月十六日熱田社怪異希代事云云。先風雨以外。其後海面二十町計光。大ナル光物飛入社頭。(中略)其後社頭託少女。種々御神託在之。今夜光物伊勢御影向云々。山田不淨間。於此社頭。今度異国責来重事御評定□八幡モ御影向云々(後略)」とあり、祈りに答えて熱田神宮に伊勢や八幡などの神々が影向して外寇に対応しようとしたという話も伝わった。

応永の外寇は実際には六月末には終息していたが、敵軍撤兵が九州探題からの注進状により都に知らされたのは八月六日で

ある。その内容は『満濟准后日記』八月七日(注五)「(前略)六月廿六日終日相戦。異国者共悉打負。於当座大略打死。或召取云々。(中略)此五百余艘ハ悉高麗国者也云々。唐船二萬余艘。六月六日可令着日本地處。件日大風起。唐船悉□帰。過半ハ没海由(後略)」とある通り、「高麗(實際は李氏朝鮮)の兵と戦つて勝利し」、実際には唐からは攻めて来なかつたのだか「唐の兵船団は日本に到着する日に大風が吹いて船の過半数が沈んでしまった」と都には伝えられ、神威による大勝利と人々に受け取られた。高野氏は「白楽天の一曲は此の憂悶中の慰の能又は退治後の喜の能であつたのではあるまいか」(注四)と述べ、応永の外寇で国内が混乱した記憶を下敷きに、唐が日本を攻める前段階として日本の智慧を計る内情視察の勅使として白楽天を送つたが、神がそれを阻むという筋書きの《白楽天》が作られたとする。

*

天野文雄氏(注六)は「(前略)白楽天を追いもどすのが、住吉明神以下、伊勢・石清水・賀茂・春日などの諸神であるという終曲部(第7段)の設定も、応永の外寇をふまえているのではないかと思われる(後略)」と述べている。《白楽天》金剛流現行謡本詞章の「住吉現じ給へば。伊勢石清水賀茂春日鹿嶋三島諏訪熱田安芸の嶺島の明神は」である。ここに挙げられた神々のうちの数柱は、《白楽天》作成に際して参考にしたと考えられる『源平盛衰記』にも記されていて、「諏訪や熱田は住吉と先に外敵を征討する神の

イメージがある」(注七)と伊藤氏は言われる。

これら神々の中で《白楽天》の後シテが住吉明神であるのは、この神に神功皇后を守護して「三韓を従えた」軍神のイメージがあり、そのイメージが中世にまで引き継がれていたからと考えられる。例として世阿弥が能《江口》で引用していることが確実である『古事談』巻第五一十七、三四九(注八)に、「住吉大明神託宣して云はく、『晋新羅を伐ちし時、吾れは大将軍為り。日吉は副將軍為り。其の後將門を伐ちし時、日吉は大将軍為り。住吉は副將軍為り(後略)』とある。外敵や謀反によつて日本の国が揺らぐ時、神々が軍隊を組織して立ち向かうこと、中でも住吉明神と日吉明神がリーダーの将軍格であることが示される。『延慶本平家物語』(注九)にも「住吉明神は凡ソ吾朝ノ大将トシテ、夷賊ヲ征伐スル事、既ニ七ケ度ナリ」と書かれている。和歌の神として知られる住吉明神は漢詩に対する和歌の優位性を語るのにふさわしい。その上、何度も外国の兵と戦つて勝つた軍神である住吉明神はさらに《白楽天》のシテとしてふさわしい神であると言える。

*

《白楽天》は、同じく前シテが老翁・後シテが男神になる《高砂》などに比較すると、上演頻度がまれな稀曲に類する曲である。

《白楽天》の上演記録を調べてみると、『能楽源流考』によれば最も古いのが寛正五(一四六四)年四月十日の札河原勧進猿楽の第三日(注十)である。これは観世流であり、下掛り系での最古

は天文十二(一五四三)年二月九日の南都新能(注十一)である。これは金春流である。さらに天正十六(一五八八)年三月晦日の下間法印にて興正寺より興行の法印演能(注十二)があるが、これも金春流であり、江戸時代以前における金剛流での《白楽天》の上演記録は見つけられなかった。

江戸時代の金剛太夫による《白楽天》上演記録を国文学研究資料館の「演能データベース」で検索したが、筆者が見つけられたもので一番古いものは以下の番組であった。

承応二(一六五三)年六月(日は不明)

「古乃御能組」に載る「江戸白浜所の■(不明)五番」という催しでその性格は不明

白楽天 シテ 金剛右京、ワキ 高安彦太郎、アイ 山本太郎
右衛門、笛 貞光安兵衛、

小鼓 大藏十兵衛、大鼓 大藏助三、太鼓 金春又右衛門

承応二年は四代將軍家綱の治世。シテは金剛太夫の右京、ワキは高安彦太郎という金剛座付きのワキ方高安流の家元によって演じられている。江戸城内の催しではないが、江戸時代前期に《白楽天》が金剛座の上演曲に加えられていたことは確実であり、しかも太夫がシテを勤め、ワキも座付きの高安流の家元がする「重い曲」として扱っていることも確実である。「重い曲」であったことが古くから稀曲である理由かもしれない。

*

先学の研究から出るものではないが、《白楽天》にどのような思想が背景としてあるのか、金剛流ではどのように扱われているのかを紹介した。廣田師には大国・唐から船に乗ってやってきた当代随一の知識人・白楽天に、悠然と釣りをしながら一歩も引かず和歌で応酬して、厳かに日本の和歌の徳を説く前ジテ漁翁の問答を聞かせて頂きたいし、後場の「真之序之舞」には品格の高い神らしい上品さと手風で敵を追い払い力秘めたとやかな舞を期待して、楽しく拝見させて戴こうと思っている。

一注

- 一 竹本幹夫「作品研究『白楽天』」『観世』第五十一巻第二号、繪書店、一九八四年二月発行、四一九頁
- 二 謡曲集 下伊藤正義校注、新潮日本古典集成79、新潮社、一九八八年十月発行、四五三―四五六頁 各曲解題 白楽天
- 三 世阿弥がいた場所 能大成期の能と能役者をめぐる環境 天野文雄著、ベリカン社、二〇〇七年二月発行、四七〇頁
- 四 日本演劇史 第一巻、高野辰之著、東京堂、一九四七年七月発行、三二七―三三一頁
- 五 「純群書類従」補遺一 満濟准后日記(上) 一原 滿保己一・補 太田藤四郎編纂、純群書類従完成会、一九五八年一月訂正三版発行、一五六―一五八頁
- 六 注三 四五九―四六〇頁
- 七 注二 二七頁 頭注八
- 八 古事談 純古事談 川端善明・荒木浩校注、新日本古典文学大系41、岩波書店、二〇〇五年十一月発行、四五六頁
- 九 「延慶本平家物語」本文篇上、北原保雄・小川栄一編、勉誠社、一九九〇年六月発行、九一頁
- 十 「能楽源流考」能勢朝次著、岩波書店、一九三八年十一月発行、二二六―二頁
- 十一 注十 二二九頁
- 十二 注十 二二八頁